

演題名:

小児服薬方法改善に向けた取り組み

要旨本文:

**【目的】**

小児科患者応対時「お薬を飲ませるのが一苦労」「全然飲んでくれない」という保護者からの訴えは多い。そこで今回、保護者独自での小児服用方法の情報収集を行い、保護者が実際に行っている上手な服用方法や飲みにくい薬剤の情報を基に、薬局内・小児科医師とアドヒアランス向上の取り組みを行ったので報告する。

**【方法】** 1)小児患者の保護者を対象に1ヶ月間アンケートを実施。内容は薬の服用方法、飲ませづらい薬、飲ませづらい薬の対処法の3項目で、応対時に聞き取りを行った。2)集計結果をポスターで薬局内に掲示し、その情報に対するアンケートを再度保護者の方に行った。3)小児科医師とも、アンケート集計結果から見出された問題点などを情報共有した。

**【結果】** 1)期間内小児患者数265名(兄弟含む)中、166名分聴取を行った。その内の63%(105名)は薬剤師が一般的には指導しない保護者独自の方法だった。2)ポスター掲示について100名中、97%の保護者が参考になったと評価した。3)特に飲みづらさを訴える薬については、医師に処方選択を変更依頼することとなった。

**【結論】** アンケートの結果、様々な服用方法が見られた事から、保護者の日常的な服用手法の中に、薬剤師・医師の知らない用法があると考えられた。また、ポスター掲示により多くの「参考になった」という意見が得られた事より、保護者発信の実際的な手法や問題点を情報として加工する一連の流れが、満足度とアドヒアランス向上に有効に働く可能性が示された。これを医師とも情報共有することで、処方内容の変容を促す結果にもつながった。今後は保護者・患者の心情面にも着目し、更なるアドヒアランスの向上、そして取り組みを通じて、患者・薬局・医師まで巻き込んだより連携性のある医療の形を模索していきたい。